

論文審査結果の要旨

本研究は、日本の看護管理者に必要な能力を明確にし、能力に応じた教育プログラムの構築に精力的に取り組んだもので、テーマの新規性・独自性は高く評価できる。また、本研究は3つの目標から構成されているが、一つの目標の結果をもとに、次の目標を達成しており、最終的に目的を達成していることから研究遂行能力も高いと判断した。

I. 予備審査では、以下の点について指摘があった。

1) インタビューの際に、看護部長からの推薦を受けた看護師長を研究参加者としているが、看護部長の推薦が適切かどうかの検討が必要、2) 研究協力施設の除外基準として、「精神病院を除く」ことがイメージできるようにする、3) 看護師長の意思決定の定義について、PDCA サイクルとの違いがわかりにくい説明文が付加されている点を再検討する、4) 看護師長の意思決定の定義と合わない2つのサブカテゴリー名を再検討する、5) 既存の尺度の選択において、検討した尺度について加筆する、6) 因子負荷量が低いものを削除しなかった理由についてさらに詳しく記述する、7) 因子の命名についての説明を追加する、8) 知識だけでは意思決定能力は向上しないが、知識とスキルに絞った理由を追記する、9) 初心者は定型的意思決定の方が学習しやすいと考えられるが、非定型的意思決定を対象とした理由について説明する、10) 今後の課題として、組織内の活用だけではなく、組織外での学習も視野に入れて記述すること。

上記の指摘事項については、公開審査時の論文では適切な修正がなされていた。

II. 公開審査では、以下の点について指摘があった。

1) ロジックモデルを選択した理由を追記すること、2) 第2段階終了後の評価の時期について、行動変容を求めるのであれば、終了後3ヶ月は短く、フォローアップ期間の延長を検討すること、3) 本研究で構築したプログラムを組織内で実施することについてのメリットとデメリットについても記載し、このデメリットについて、どのような対策を考えているかを追記すること。

最終論文では、公開審査時の指摘事項について、適切に修正がなされていた。

以上のことから論文審査委員会は、予備審査結果および最終審査結果の指摘に沿って修正された結果、本論文の論旨の一貫性がより明確になり、看護実践・看護学教育における介入プログラムの提案も具体的に提示されたことから、学位規則第4条第1項に定める博士（看護学）の学位を授与することに値するものであり、申請者は、看護学における研究活動を自立して行うに必要な高度な研究能力と豊かな学識を有するものと認め、論文審査ならびに最終試験に合格と判定した。